

袋井の歴史資料展

平成24年12月10日～平成25年4月19日

袋井市
歴史文化館



2 『^{つたや}蔦屋版 東海道五十三次 袋井』
^{うたがわひろしげ}初代歌川広重 (18.0×24.0 cm)

東海道五十三次の浮世絵を数多く残した初代歌川広重の作で、嘉永元(1874)年に刷られた。横中判の大きさで、版元は蔦屋吉蔵(紅英堂)。



3 『^{ほうえいどう}保永堂版 東海道五十三次 袋井』
^{うたがわひろしげ}初代歌川広重 (25.0×37.0 cm)

袋井を描いたこの作品は「^{でちややす}出茶屋図」とも呼ばれている。横大判の大きさで、版元は保永堂(竹内孫八)と、^{せんかくどう}仙鶴堂(鶴屋喜右衛門)の共同出版。



16 『東海道五十三次ノ内 袋井・掛川』
^{うたがわとよくに}三代歌川豊国 (36.0×24.5 cm)
縦大判の大きさで、版元は木屋宗次郎。



25 『^{とよくにまんがずえ}豊国漫画図絵 日本左衛門』
^{うたがわとよくに}三代歌川豊国

(縦 36.8×26.0 cm)
^{しらなみごにんおとこ}白波五人男の内、日本左衛門を描いたものである。日本左衛門(1719～47)は、江戸時代中期の盗賊で本名は浜島庄兵衛、通称十衛門、歌舞伎では日本左衛門と呼ばれている。万延元(1860)年の印刷。縦大判の大きさで、版元は魚屋栄吉(魚栄)。

13 『東海道五十三対 袋井 三代』
^{うたがわとよくに}歌川豊国 (35.8×24.5 cm)

初代歌川広重と、三代歌川豊国・^{くに}国芳の三名が各宿駅を分担して描いたシリーズで、宿場にちなむ^{こじ}故事や風俗を画題としている。弘化元～三(1844～46)年の出版。縦大判の大きさで、版元は伊勢市。



26 『芝居役者絵 種瓢真書太閤記』
^{とよはらくにちか}豊原国周 (37.0×70.5 cm)

縦大判三枚に「^{しんしょたいこうき}真書太閤記」をもとに演じられた歌舞伎を題材とし、今川義元(中村芝翫)、朝比奈備中守(片岡我童)、木下藤吉郎(市川團十郎)、松下嘉平治(市川九蔵)の四人を描いている。松下嘉平治は、久野城主の松下之綱のことである。明治十七(1884)年に刷られており、版元は小林鉄次郎(延寿堂)。

30 『東海道五十三次 袋井』 葛飾北斎 かつしかほくさい

(11.8×16.5 cm)

狂歌が画面上部に三首書かれている。享和四 (1804) 年正月の刊行。横小判の大きさ。

酒上長房

大黒の袋のうちもはる駒に よろつの宝つけてきのえ子
春駒成

くれないの霞の色の匂へるハ たか汲とその袋井の里
反甫奴加留

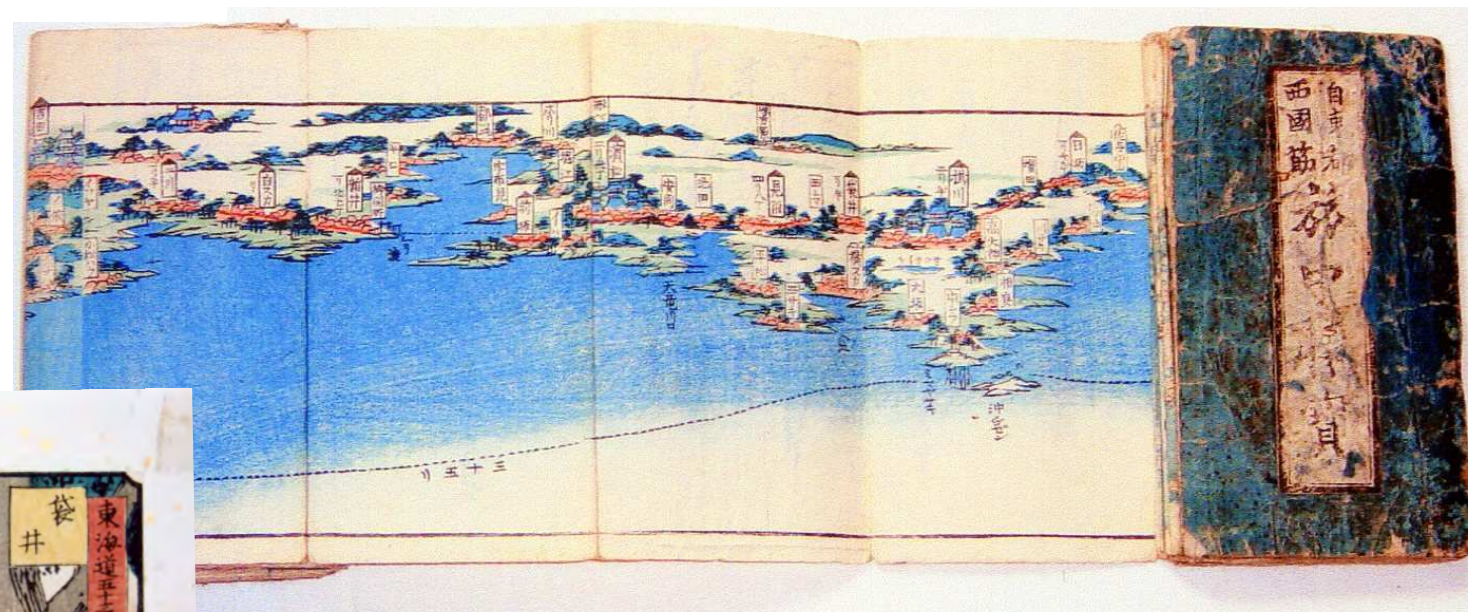
千金の春を納めてきのえ子ハ 大黒天の知恵の袋井



31 『契情道中双禄 ふくろ井』 けいせいどうちゆうすごろく

溪斎英泉 (38.5×25.8 cm)

全面に吉原倉田屋の遊女「えにし」を描き、画面左上に袋井宿の風景を描いている。本作品のシリーズ『傾城道中双禄』は、文政八 (1825) 年から天保十三 (1842) 年にかけて刊行されている。縦大判の大きさで、版元は葛屋吉蔵 (紅英堂・蔦吉)。



89 『自東都西国筋旅中懐宝』 とうとよりさいごくすじりょちゆうかいほう (14.1×7.8 cm)

江戸から鹿児島までの海岸線沿いの街道を鳥瞰図に描いたもので、多色刷りにより、海岸線・街道・宿場が記されている。



95 『東海道名所膝栗毛画帖』 とうかいどうめいしよひざくりげがちょう (36.0×25.0 cm)

大正七 (1918) 年刊行。このシリーズは名所と記されているが、その後の膝栗毛の字が示す様に、弥次さん、喜多さん二人が各宿の中に登場し、宿の様子や出来事をコミカルに描き、宿駅名の白内枠の中には狂歌が一首添えられている。版元名は不明で作画者「為信」の詳細もわからない。

61 『東海道五十三次 江戸～京』 重宣 [二代歌川広重] しげのぶ うたがわひろしげ (15.0×10.6 cm)

五十三次に京都清水寺などを含め、五十六枚組で一冊に表装されている。嘉永六 (1853) 年に出版。横大判の大きさで、版元は山城屋甚兵衛。

